

登校された全教育大の学友諸君に、夏休みを返上してバリケードを守り抜いた斗う學生を代表して、現局面の報告と、試験阻止を中心とするところのこれからの方針について提起したい。

我々はまずもつて、二か月に及ぶ夏休み中バリケードを守り抜いたこと、つまり一切の新しい情勢はその上にのみあり得てゐるということを前提的に考えておく必要があるだろう。今日のこのバリケードなくしてはいかなる斗争への呼びかけも何の現実性も持たない無意味なものであつたろう。このことのむづきみをまずしつかりと受け止めさせておいてほしい。

その上にたつて、この間に起きた新しい事実と権勢の変化を若干報告しておきたい。一口に言うならば局面は我々の望む方向へ展開してゐる。すなわち、筑波移転実力阻止本館封鎖という我々の基本的方針はついに敵・学校当局をひきすり出すことに成功した。すなわち、一方では調査会の文部省提出（ハ・ニ〇）をなしつつ、一方では保証人への手紙や奨学金交付停止による学生弾圧、という基本的姿勢をとりつつも、学生の補導は教授会にという自らの定めた学生の「補導」（=弾圧）と詮めしの方針を一応ヒリツブけてきた。学校当局は、ついに文教委員の無能が失しがれを切らして自らその積極的な弾圧にのりだしてさだ。それが八月二八日の評議会における本館封鎖対策特別小委員会の設置である。「学部自治」という自らの論理をかなぐり捨て弾圧へ露骨な姿を現わしたことには、この間の我々の手いが学校当局の期待と予想を裏切つてゐることへのあせりと、その受けた痛手をまざまざと示していく。さらに、九月十五日までに自主的に本館封鎖を解除させたハレと願つていた当局は、夏休みがバリケードと共に明け、学収が続々と登校してくるに至つてまたちや新しに苛立ちとグレンマに陥つてゐる。すなわち、最後の切り札としての官憲導入が東大、日大においてことごとく失敗し、遂に圧倒的大衆の噴激を呼び起こしてゐることである。偏観的自然消滅は期待できなかつし、あすの口辱下出ると逆に大反撃をくらう。頼みの綱は「一般学生」の「良説」へ権力に従順なるすべを心得てゐることと、それを組織的に利用するところの民青系諸君の身である。その唯一の攻撃の口は、本館封鎖を指にした「一般学生」の懷柔による斗争内部から切り崩しであろう。すでに始められている各担任からの、教室会議に名を冠りた談得オルグ活動はさの「展望」を極くものとして権力的に進められるに違ひない。だが「本館封鎖」をめぐる斗争は我々の望むところであり、我々は憂鬱的ではなく、むにこれを武器に攻撃的に切りぬむことによつて、黒字ストへの展望を切り拓くと同時に当局の懐柔の動きをも漸々に打ち碎くことができよう。

次に我々はこのような大学校長局の攻撃あるいは文部省からり攻撃の中に筑波大学そのものの姿があることをつかふねばならぬ。すなわち、教育の帝國主義的再編の一環としての大学の目内別再編成とその重要不譲類の産婆並同路線は、現実的には大学における権力の集中化と、学生自治の抹殺を不可避的過程として進行してゐる。新寮建設や学部の複数に伴う攻撃ちやることながら、現在全国的に進められてゐる大学の格闘に伴う統廃合はそれを一举に成し遂げるものとしてさわめて強力な手段となつてきつてゐる。その中でもこの跋扈移転は產婆並同の典型的討伐ものとしてあるだろう。このように教育の帝國主義的再編に伴う大学への攻撃は現在的には七十年を復讐において攻撃として分けられてきつてゐる。すなわち昨年の十・八羽田を突破口とした七十年を保打被への斗争は罪とありとあらゆる敵の武器を引き出さずにつながつた。それは反体制の側大、対舊力の基本的な姿勢を定着化せしめた。その教訓の上に初めて今日の数多くの学園斗争の長期的・非妥協的斗争が築かれることを我々ははつきり見てとらねばならない。それは同時に体制の側にも教訓を与える、十・八以降に見られる授学生の打ち切りという形で算定されて每年の攻撃は各大学、なかなか教育大においても奨学金の停止という形で算定さ

れてはいる。技術的に可能などと確認した上での該監事務の拒否もニラしで政治的意図を露骨に現わしたもの以外のむにものでもない。さらに「大蔵特別立法院」に見られる、ストラクチャに対する自動的体

開始された。星での斗争深原謹君は星斗へ移集し、星学スト、試験阻止への斗いに冷たく立上がり、我々反戦団隊の先頭に立って斗争などを宣言する。

私たちの反戦斗争の爆発的鼎揚と、その上にたつた  
さと共に、学生の斗争の圧殺と権力の大學生の画策介入と直接支配を意図したものにはからら  
す。今後の斗争がいかなる斗争であろうとも、國  
の運営との直接対決の方向へ進むべく得なれることは  
必ずや必然的とはつきてきている。我々はそれに対する  
立場は決してない。そこまでもうついだのは我々の  
立場であり、追いつめられた四家権力である。斗争  
は必ずそれとの結廻しを本來の中にのみ勝利への  
道を開いてくれるのであり、そのことの中に、日大、  
東大との連携も初めて可能となるのだ。我々は自ら  
が切り抜いた地平を再確認し、さらに身構えて突き  
進むべき道を進む。

\* 筑波移転実力阻止

\* 本館封鎖死守

\* 塾學対策委員会

\* 巨館完全封鎖

\* 前期試験阻止

\* 塾学ストをかちどれ

\* 塾学斗争の発展をかちどれ

反戰會議

景を伏さえたうえで、具体的に以後の方針を打ち出していく。それをいうまでなく、無期限スト・真誠、全学ストを目指した斗争であり、試験阻止を第一歩内においたところの全学ストへの道である。それは基本的に次の三つの方針を柱として成し遂げられるであろう。すなわち「本館封鎖死守」、「学生争奪の結成」、「E館完全封鎖」である。最初に述べたように「本館封鎖」が軸となることはいうまでもない。加えて、「E館完全封鎖」による本館、E館、G館の児童学生管理によつて教育学部事務室・附属等のスパイ活動防止とはカリ、学校当局との全面対決を打ち出しうることは、今後の斗争の方向性を鮮明にするだろう。さうに「全学斗」の結成によつて全面化への具体的朝敵化を進めることである。民青執行部の庄毅と敵討の中でよう理農教体の室友を全学的に離脱する二の全学斗の活動が今後の決定的な鍵を握っていると言えるだろう。

オウ澤友諸君、理学部では18日又は20日に予定されていゝ学生大会へ向けて、再度のストライキ実現への斗いが急ピッチで進められてゐる。農学部でも一連協、二連協を中心に試験ボイコットへの準備が